

選抜資料としての調査書

倉元直樹（東北大学高等教育開発推進センター）

西郡大（佐賀大学アドミッションセンター）

石井光夫（東北大学高等教育開発推進センター）

調査書は選抜資料として常に活用が推進され、実際に推薦入試やAO入試では利用されてきた。しかし、調査書には選抜資料としての構造的欠陥がある。それは作成時の評価基準の恣意性や評価内容の曖昧さに由来する。本研究では、平成k年度に東北大学A学部に出願した志願者の調査書から学習成績概評の分布に注目して分析を加えた。その結果、明白な選抜方法の影響は見出されなかったが、コースと地域によって分布の違いが見られた。

1. 大学入試の多様化と調査書重視

大学のユニバーサル化の帰結として全体的に大学入試の選抜性が低下していることは事実である。昨年末に出された中教審答申（中央教育審議会、2008）では、それが「大学教育における質の保証が困難になってきている」ことを示すと認識されている。しかし、短絡的に大学入試の選抜性の低下をもって大学入試がわが国の教育に占める重要性そのものが低下したと考えるべきかと言えば、それはまた別の話である。

実際には、大学入試においてはユニバーサル化だけが問題なのではない。大学進学率の向上と時期的に並行して、大学入試の多様化が政策的に進められてきたことが重要な鍵を握る。臨教審第一次答申（臨時教育審議会、1985）によって本格化したと言われる大学入試の多様化政策だが、その頃、「多様化」という言葉は、^{なんびと}何人たりとも抗いがたい絶対的な権威を漂わせていた。天野（1992）は「多様化」という言葉を大学入試改革における「錦の御旗」と表現している。「多様化」という看板さえ掲げれば、制度変更の内実がどのようなもので許されてきたことを揶揄する表現と思われる。

当時は大学のユニバーサル化に対する意識は薄く、むしろ、受験地獄の解消が政策課題の中心に置かれていた。しかしながら、根本的に状況が変わった現在でも、相変わらず大学入試改革の理念の中心には「多様化」という概念が厳然と存在し続けている。理念としての多様化に

対して疑問を呈することはできたとしても、多様化という考え方そのものを否定することは難しい。したがって、多様化とは実際に何を意味するのか、その内実をある程度具体的に把握することが重要になる。

倉元・當山・西郡（2008）は大学入試の多様化の具体的な中身として実質的に「選抜資料の問題」、「学生集団の問題」、「複数受験機会の複数化」が挙げられるのではないかと指摘した。それぞれ重要なテーマであるが、本研究が主題とする調査書は、その中では「選抜資料の問題」の一つに位置づけられるだろう。

大学入試の多様化政策の中で、調査書は評価尺度として常に重視され、選抜資料としての活用が期待されてきた（木村・倉元、2006）。直近の中教審答申（中央教育審議会、2008）でも、改めて「大学に期待される取組」の中で「推薦入試において、評定平均値を出願資格や出願の目安として募集要項に明記する等、調査書の積極的な活用に努める」といった提言がなされ、調査書にAO入試・推薦入試における学力把握の手段としての役割が期待されている。また、実際に、調査書は推薦入試、AO入試では学力評価のための資料としては、これまでも積極的に活用されてきた（富永、2005）。

2. 調査書の構造的欠陥

一方、学力検査を主たる選抜資料とする一般入試では、調査書の利用は参考程度にとどまっ

ている(富永, 2005)。それは、主として調査書作成時の評価基準の恣意性とそこから結果的に導かれる公平性に対する瑕疵に帰着すると思われる。すなわち、評価結果として与えられる評定値の算定基準が曖昧であり、同一基準で評価される集団を超えては、同じ数値が学力の等価性を保証できないのである。例えば、倉元・川又(2002)は、東北大学のAO入試Ⅱ期で出願基準として課されている「学習成績概評A」の分布に着目し、その比率が10%未満から90%以上まで広がっていることを見出している。

学力以外の要素を調査書から拾い上げて評価を試みることも考えられる。具体的には、「指導上参考となる諸事項」や「備考」の記述を選抜資料として利用することが念頭に上る。しかし、その指標が実際に何を評価しているのかを考えると、難しい問題が残される。調査書が高校教員によって作成されることを忘れてはならない。結局、評価結果は志願者本人の活動に加えて、記述を担当した教員の力量に大きな影響を受けてしまう。すなわち、志願者本人だけではなく、教員の意欲と作文能力とを同時に評価していることになるのだ。

調査書が入学後の成績をよりよく予測するという認識も誤解に基づくものである。それは、不合格者の成績がデータとして存在しないという追跡調査特有の構造的問題による。その事実は個別大学の追跡調査でも再三指摘されてきた(例えば、小嶋・村上, 1991; 倉元・奥野, 2006)。さらに、調査書重視を導いた「総合的かつ多面的な評価」政策推進の根拠とされた資料自体も、重回帰分析に関わる基本的統計的性質の見落としに由来する(木村, 2007)という問題もある。

受験生によるパフォーマンスを直接的に評価する学力検査や面接試験等とは異なり、提出書類の評価に際しては、他者の介入を意識する必要がある。もちろん、本人が記載すべき事項に他人の手が介入していないかという点の確認も大切だが、調査書の評価の問題はそれとは異なる問題であろう。大学入試のあり方は高校教育に大きな影響を与える(倉元, 2006a)。調査書が

意図的に操作されているというような意味合いではなく、選抜方法が評価基準に間接的に影響を及ぼしていないかどうか、確認することが重要だと思われる。

東北大学には、主要な選抜の種類として、現在、一般選抜、AO入試Ⅱ期およびAO入試Ⅲ期が設けられている。そのうち、AO入試Ⅱ期の各区分には、出願要件の一部に「学習成績概評A(評定平均値4.3以上)」が含まれている。AO入試Ⅱ期への出願を考えれば、学習成績概評A段階に達しているかどうか、極めて重要なハードルとして機能している。

そこで、本研究では学習成績概評Aの分布に見られる特徴に着目して統計的な分析を加え、選抜方法が調査書の評価基準に影響を与えている兆候が見られるのかどうかについて検討することとした。

3. 方法

3.1 分析対象データ

平成k年度に東北大学A学部に出願した志願者のうち、AO入試Ⅱ期に対する出願資格を有する卒業見込み生(現役生)の調査書を対象とした。分析する変数は「4. 学習成績概評」の「成績段階別人数」欄に記載されたA段階の人数および合計人数から、「評定の甘さ・辛さ」を倉元・川又(2002)のSS値¹に変換して表した値である。分析の単位は学校であるが、同じ学校でも異なるコースは異なるオブザベーション(学校)として扱うこととした。なお、調査書の作成時期によって値が異なる場合には、一般入試前期の数値を優先して採用した。

3.2 地域分類

志願者の出身高校の所在地については、都道府県を単位として倉元(2007)にしたがい、「東北大学の入試」という観点に立脚した分類を行った。すなわち、東北大学に最も関心が深い「第1群(ホーム: 東北6県)」、第1群に次いで東北大学に関心が深い「第2群(ネイバー: 周辺7県)」、100万人以上の大都市を抱える「第3群(シティ: 10都道府県)」、東北大学とは縁遠い「第

4群（アウェー：24府県）」とする4分類である。

3.3 大学入試の影響の指標

AO 入試Ⅱ期ではセンター試験などの学力検査が課されていない。そのため、調査書の評価の合否に対する影響力は他の区分よりも総じて強い。さらに、AO 入試Ⅱ期の受験生の間では、調査書の合否に対する影響力が実際よりも強く意識されている（倉元・山口・川又, 2007）。

そこで、本研究では志願者の中にAO 入試Ⅱ期への志願者が含まれていたかどうかを選抜方法の影響指標とみなすこととした。

4. 結果

4.1 分析対象データ

浪人生や同一の高校からの複数の志願者による重複を除くなどのデータクリーニングの結果、最終的に本研究の分析対象となったのは563校であった。そのうち、AO 入試Ⅱ期へ志願者を輩出した学校は119校（21.1%）、残りの444校（78.9%）はAO 入試Ⅱ期以外の種類への出願者のみであった。高校の所在地は、第1群が103校（18.3%）、第2群が89校（15.8%）、第3群が237校（42.1%）、第4群が134校（23.8%）であった。コースは普通科が498（88.5%）、理数科が63（11.2%）、その他が2（0.4%）であった。なお、コースに関わる分析を行う場合には、普通科と理数科のみに限定する。

AO 入試Ⅱ期への志願者は第1群が61校（51.3%）と最も多く、次いで第3群が28校（23.5%）、第2群が16校（13.5%）、第4群が14校（11.8%）と偏りが見られる（ $\chi^2_{(3)}=111.7$, $p<.0001$ ）。AO 入試Ⅱ期への出願に対してコースの偏りはない。ただし、コースと地域区分には偏りがあった。理数科が第1群に多く、逆に第3群には少なかった（ $\chi^2_{(3)}=10.8$, $p<.05$ ）。

4.2 SS値の分布

SS値の分布は表1に示すとおりである。全体としては、想定どおりに平均値が4.25付近となったが、個別の事例では辛い評価から甘い評価まで、ばらつきが見られた²。

表1. SS値の分布

	平均 (sd)	最小	最大
全体	4.28 (0.23)	3.04	4.98
AOⅡ期志願有	4.29 (0.23)	3.30	4.98
AOⅡ期志願無	4.22 (0.24)	3.04	4.72
第1群 (ホーム)	4.21 (0.20)	3.60	4.72
第2群 (ネイバー)	4.26 (0.23)	3.51	4.63
第3群 (シティ)	4.33 (0.23)	3.30	4.98
第4群 (アウェー)	4.24 (0.24)	3.04	4.89
普通科	4.30 (0.21)	3.40	4.98
理数科	4.06 (0.31)	3.04	4.63

4.3 AOⅡ期の影響

AOⅡ期志願の有無（以下、「AOⅡ期」と略記する）と地域、AOⅡ期とコースを要因として、それぞれ2元配置の分散分析を行った。

AOⅡ期と地域の2要因では交互作用とAOⅡ期の主効果はなく、地域差の主効果が見られた（ $F_{(3,555)}=6.44$, $p<.001$ ）。シエツフェによる多重比較の結果、第1群、第4群と比較して第3群の評定が有意に厳しかった（表2-1）。

表2-1. 「AOⅡ期」と「地域」の分散分析表

	df	SS	MS	F値	p値
AOⅡ期	1	0.150	0.150	2.85	.0921
地域	3	1.015	0.338	6.44	.0003
交互作用	3	0.064	0.021	0.41	.7480
誤差	555	29.159	0.053	—	—

表2-2. 「AOⅡ期」と「コース」の分散分析表

	df	SS	MS	F値	p値
AOⅡ期	1	0.420	0.420	8.67	.0034
コース	1	3.160	3.160	65.27	.0000
交互作用	1	0.004	0.004	0.08	.7750
誤差	557	26.964	0.048	—	—

AOⅡ期とコースの2要因では交互作用はなく、双方の主効果が有意となった（AOⅡ期： $F_{(1,557)}=8.67$, $p<.001$ 、コース： $F_{(1,557)}=65.27$, $p<.0001$ ）。ただし、AOⅡ期の主効果は、第1群の比率が高いことが背景の原因となった見かけのものと考えられるので、AOⅡ期の影響とみなすことはできないと思われる（表2-2）。

5. 考察

倉元・川又 (2002) においても、コースによる SS 値の違いが報告されていたが、本研究でも同様の現象が確認された。学習成績概評欄の人数はコース別に記載することになっている。普通科と理数科が併設されていてコース間で学力に差がある場合、普通科と理数科で共通する科目に対して同一の基準で評定を付けた上で評定平均値を計算すると、学力が高いコースに所属する学生が相対的に良い成績を修めることになる。その上で、調査書の学習成績概評欄に記載される人数がコース別となっていれば、学力の高い生徒が集まっているコースの評定が見かけ上、甘くなってしまう。学力差が大きいほど、その傾向は激しくなる。SS 値において、全体として相対的に理数科の評定が甘く見えるのは、このような事情によると推測される。

全体として大学入試の選抜方法が高校教育に影響している事実はあるのだろうが、本研究の分析結果で見ると、東北大学の他の入試区分と比較して AO 入試Ⅱ期の調査書が甘く付けられている兆候は見当たらなかった。ただし、評定の厳しさには地域差が見られた。もしかすると、出願先の大学の入試の態様や進学指導体制の地域による相違が総体として与える影響が地域差として析出されたのかもしれないが、本研究の分析の範囲では確認できない。

6. まとめ

大学入試の多様化とは、見方を変えれば「大学入試の自由化」を意味する。すなわち、それぞれの大学に対して、自らが置かれた状況に応じて適切な入試制度、入試方法を設計し、遂行する自由が与えられたということである。それは同時に、個々の大学に対して入試を設計する能力が問われるようになったことを意味する。倉元 (2006b) は「個別利益と全体の利益、短期的利益と長期的利益の調和」を図るため、「大学入試学 (Admission Studies)」構築の必要性を唱えた。大学入試には一般に「常識」として信じられていることと実際の機能が 180° 異なる

ことも稀ではない。本研究で取り上げた調査書もその例だが、志願倍率に関する認識も好例である (植田・内海・平, 1996; 西郡・倉元, 2009)。志願倍率の向上に力を注ぐことによって、逆にアドミッション・ポリシーに合致した学生を逃す結果となる可能性は否定できない。

入試は小手先でお茶を濁すことのできるものではない。1999 年の中教審答申 (中央教育審議会, 1999) 以来、アドミッション・ポリシー (入学者受け入れ方針) が重要だとされ、各大学は工夫に余念がない。しかし、実際には、受験生には「アドミッション・ポリシー」という言葉すら認知されていない。鳴野・鈴木 (2006) の調査によれば、大学進学希望者の中でアドミッション・ポリシー (AP) という言葉を聞いたことがある者はわずか 13.8% に過ぎなかった。倉元・佐藤 (2006)、佐藤・倉元 (2006) は氾濫する多様な学部名に対する高校生のイメージを調査した。その結果、多くの新しい名称が高校生から見て印象が悪く、むしろ、古くからの伝統的な名称が好印象を持って受け止められていた。今後もこういった状況が大幅に変わることはないだろう。それは、受験生の目から見て、自分の将来につながるクリティカルな情報とは合否に直結するものだからである。「高校側は『入試問題』の内容そのものが大学のアドミッション・ポリシーと考える傾向が強い (倉元・小川・森田・関川・奈良・高屋敷, 2002)」のである。実際、個別大学の立場からアドミッション・ポリシーと入学前教育や選抜資料の整合性を問うような研究も現われている (島田・白川・渡邊・山根, 2006; 大久保, 2008)。

大学入試の設計は、アドミッション・ポリシーや学部名称のような看板、文言のレベルの工夫では不十分と言える。実質的にどの程度の労力をかけて何を課し、どのような能力を問い、最終的にどのような選抜結果が出されるか、その具体的な内容が問われることになる。厳しい表現だが、結果的に「良問を通じて受験生を育てる大学か、学力度外視で志願者集めをする大学か (倉元, 2008)」が試されているのである。

受験生に適切な努力を促し、それに見合った成果を公平に評価している入試であるかどうか大学の社会的評価に直結することになるだろう。

本研究でも改めて明らかにされたように、調査書はたしかに選抜資料として本質的な構造的欠陥を内在している。少なくとも、東北大学の場合、調査書を選抜資料として積極的に活用することは高校教員からも望まれていない(倉元・當山・西郡・石井, 2009)。大学入試の現場としては、調査書の選抜資料としての積極的活用に対して政策的に後押しがあったとしても、評価尺度として構造的な欠陥を持ち、志願者の側からも望まれてない選抜資料に依存した入試方法に移行するわけにはいかない。

しかしながら、調査書を大学入試の選抜資料から排除することが常に正しいとも言えない。調査書を適切に活用することを考えなければならぬ場面もあるだろう。そのためには、テスト・スタンダード的な観点(日本テスト学会, 2007)から見た測定装置としての調査書の性能と限界を理解し、把握しておく必要がある。その上で、あえてそこから何を情報として取り出そうとするか、狙いを明確に定めることも必要だ。さらに、他の選抜資料とのバランスの中で、調査書をどのように位置づけるべきかが決定的に重要である。例えば、学力検査による評価を選抜の主力に置いた上で、合否ボーダー層に対する別次元からの評価尺度として調査書を活用するような発想(倉元・金澤, 2009a, 2009b)も有望だろう。そのようなアイデアを自然に入試方法の中に埋め込み、具体化するためには、戦略的な入試設計の考え方とそれに見合う技術水準が求められるのである。

注

1. SS値は「概評A」と「概評B」の標準的な境界値を4.25とした上で、概評Aの割合から学校ごとの評定の甘さ・辛さを相対的に評価する。甘い評価ほど値が小さくなる。ちなみに、高校調査書に記載される評定は「5段階絶対評価」となっているが、実態として「絶対評価」の具体的

内容が不明瞭であることは、例えば、倉元・川又(2002)が指摘している通りである。

2. ちなみに、最小値の「3.08」は、学習成績概評の基準では「C段階(3.4～2.7)」に該当する。
3. 例えば、平成22年度大学入学者選抜実施要項(文部科学省高等教育局長, 2009)によると、『学習成績概評』の欄は、高等学校における同一学年生徒全員(ただし、教育課程の異なる類型のある場合は類型別、専門教育を主とする学科の場合は科別)・・・となっている。分析対象とした年度の通達も、この部分に関しては同一である。

文献

- 天野郁夫(1992)。「大学入学者選抜論」『IDE・現代の高等教育』338, 5-12.
- 中央教育審議会(1999)。「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」.
- 中央教育審議会(2008)。「学士課程教育の構築に向けて(答申)」.
- 木村拓也(2007)。「大学入学者選抜と『総合的かつ多面的な評価』 -46答申で示された科学的根拠の再検討-」『教育社会学研究』80, 165-186.
- 木村拓也・倉元直樹(2006)。「戦後大学入学者選抜における原理原則の変遷 -『大学入学者選抜実施要項』「第1項 選抜方法」の変遷を中心に-」『大学入試研究ジャーナル』16, 187-195.
- 小嶋秀夫・村上隆(1991)。「入試成績と教養部の成績との相関関係 -3年度分の成果-」『大学入試研究ジャーナル』1, 27-31.
- 倉元直樹(2006a)。「新教育課程における東北大学の入試と教育接続 -主に理科・情報, および, 入試広報の観点から-」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』1, 1-14.
- 倉元直樹(2006b)。「東北大学における『アドミッションセンター』の取組と課題」『'06 大学入試フォーラム』29, 15-23.
- 倉元直樹(2007)。「東北大学入試広報戦略のための基礎研究(1) -過去10年の志願者数・合格者数等から描く『日本地図』-」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』2, 9-22.

- 倉元直樹 (2008). 「大学入試問題 安易な『再利用』に走るな」『読書新聞』2008年4月10日
- 倉元直樹・金澤悠介 (2009a). 「大学入学者選抜における調査書利用の考え方 - 『合否入替り』法を利用して-」『日本高等教育学会第12回大会発表要旨集録』100-101.
- 倉元直樹・金澤悠介 (2009b). 「大学入試における『評価尺度の多元化』に則った調査書利用法に関わる一考察」『日本テスト学会第7回大会発表論文集』150-153.
- 倉元直樹・川又政征 (2002). 「高校調査書の研究 - 『学習成績概評A』の意味-」『大学入試研究ジャーナル』12, 91-96.
- 倉元直樹・奥野攻 (2006). 「『追跡調査』の技術的検討 - 東北大学歯学部事例-」『大学入試研究ジャーナル』16, 21-29.
- 倉元直樹・佐藤洋之 (2006). 「高校生の大学イメージ」『大学入試研究ジャーナル』16, 179-185.
- 倉元直樹・小川瑞穂・森田康夫・関川準之助・奈良昌孝・高屋敷一博 (2002). 「高校と大学の教育接続を重視した試験問題開発研究」, 夏目達也編『高校と大学のアーティキュレーションに寄与する新しい大学入試についての実践的研究, 平成13年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究 [A]), 研究課題番号 12301014, 研究代表者 夏目達也, 中間報告書』110-160.
- 倉元直樹・當山明華・西郡大 (2008). 「AO入試の実情調査(1) - 大学入試の多様化とAO入試-」『日本テスト学会第6回大会発表論文集』82-83.
- 倉元直樹・當山明華・西郡大・石井光夫 (2009). 「東北大学AO入試における調査書利用の考え方と高校側の意見」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』4, 147-159.
- 倉元直樹・山口正洋・川又政征 (2007). 「受験生からみた東北大学工学部のAO入試」『大学入試研究ジャーナル』17, 43-49.
- 文部科学省高等教育局長 (2009). 『平成22年度大学入学者選抜実施要項』21文科高第6143号.
- 日本テスト学会編 (2007). 『テスト・スタンダード - 日本のテストの将来に向けて-』金子書房.
- 西郡大・倉元直樹 (2009). 「高校生が大学入試に期待する評価方法 - 進学校を対象とした調査から-」『全国大学入学者選抜研究連絡協議会第4回大会研究発表予稿集』, 39-44.
- 大久保敦 (2008). 「高校調査書及びアドミッション・ポリシーで重視される内容の比較 - 高校調査書『指導上参考になる諸事項』に記載されている内容の分析から-」『大学入試研究ジャーナル』18, 31-36.
- 臨時教育審議会 (1985). 『教育改革に関する第1次答申』総教第200号.
- 佐藤洋之・倉元直樹 (2006). 「入試広報としての学部名称を考える - 高校生はどう捉えたか-」『教育情報学研究』4, 25-33.
- 鳴野英彦・鈴木規夫 (2006). 「受験生から見たアドミッション・ポリシーと入学受入方策」『大学入試研究ジャーナル』16, 143-148.
- 島田康行・白川友紀・渡邊公夫・山根一秀 (2006). 「入学前教育の在り方を再考する - アドミッション・ポリシーとの整合性」『大学入試研究ジャーナル』16, 113-118.
- 富永倫彦 (2005). 「入学者選抜における調査書利用の実態調査」『大学入試研究ジャーナル』15, 85-91.
- 植田規史・内海爽・平直樹 (1996). 「愛媛大学医学部における小論文入試への取り組みとその成果について」『大学入試センター研究紀要』25, 1-40.